

中島敦

幸福



幸

福

昔、この島に一人の極めて哀れな男がいた。年齢としを数えるという不自然な習慣がこの辺には無いので、幾歳と
いうことはハッキリ言えないが、余り若くないことだけは
確かであつた。髪の毛が余り縮ちぢれてもおおらず、鼻の頭
がすっかり潰つぶれてもおおらぬので、この男の醜しゆうぼう貌は衆人
の顰ひんしょう笑の的となつていた。おまけに脣くちびるが薄く、顔色
にも見事な黒檀こくたんのような艶つやが無いことは、この男の醜しゆうぼうさを
を一層甚だしいものにしていた。この男は、恐らく、島

一番の貧乏人であつたらう。ウドウドと称する勾玉まがたまのよ
うなものがパラオ地方の貨幣であり、宝であるが、もち
ろん、この男はウドウドなど一つも持つてはいない。ウ
ドウドも持つていない位だから、これによつて始めて購あがな
うことの出来る妻をもてる訳がない。たった独りで、島
の第一長老の家の物置小舎の片隅に住み、最も卑しい召
使として仕えている。家中のあらゆる卑しい勤めが、こ
の男一人の上に負わされる。怠け者の揃つたこの島の中
で、この男一人は怠ける暇が無い。朝はマンゴの繁み
さえすに嘯る朝鳥よりも早く起きて漁に出掛ける。手槍ピスカンで大蛸おおだこ

を突き損そこなつて胸や腹に吸い付かれ、身体中腫れ上るこ
 ともある。巨魚きょぎょタマガイに追われて生命いのちからがら独木舟カヌー
 に逃げ上ることもある。鹽たらひほどもある車渠アキム貝ムに足を挟
 まれ損ったこともある。午ひるになり、島中の誰彼だれかれが木蔭や
 家の中の竹床の上でうつらうつら午睡ごすいをとる時も、この
 男ばかりは、家内の清掃に、小舎の建築に、椰子やし蜜採り
 に、椰子繩ゆ綯ゆいに、屋根葺ふきに、家具類の製作に、目が
 廻るほど忙しい。この男の皮膚はスコールの後の野鼠の
 ように絶えず汗でびっしより濡れている。昔から女の仕
 事と極められている芋田ムセイの手入の外は、何から何までこ

の男が一人で働く。陽が西の海に入つて、麵麴パンの大樹の梢こずえに大蝙蝠おおこうもりが飛び廻る頃になつて、ようやくこの男は、犬猫にあてがわれるようなクカオ芋の尻尾しっぽと魚のあらとにありつく。それから、疲れ果てた身体を固い竹の床の上に横たえて眠る——パラオ語でいえばモ・バヅ、すなわち石になるのである。

彼の主人たるこの島の第一長老ルバツクはパラオ地方——北はこの島から南は遠くペリリュウ島に至る——を通じて指折の物持ちである。この島の芋田の半分、椰子林の三分の二はこの男のものに属する。彼の家の台所には、極上

鼈甲製べつこうの皿が天井まで高く積上げられている。彼は毎日海亀の脂や石焼の仔豚や人魚の胎児や蝙蝠の仔の蒸焼などの美食に饜あいでいるので、彼の腹は脂ぎって孕はらみ豚のごとくにふくらんでいる。彼の家には、昔その祖先の一人がカヤンガル島を討った時敵の大將をただの一突きに仕留めたという誉れの投槍が蔵されている。彼の所有する珠貨ウドウドは、玳瑁たいまいが浜辺で一度に産みつける卵の数ほど多い。その中で一番貴いバカル珠に至っては、環礁リーフの外に跳梁ちようりようする鋸鮫のこぎりざめでさえ、一目見て驚怖退散するほどの威力を備えている。今、島の中央に巍然ぎぜんとして屹立きつりつする

・蝙蝠模様で飾られた・反り屋根の大集会場を造ったのも、島民一同の自慢の種子である蛇頭の真赤な大戦舟を作ったのも、すべてこの大支配者の権勢と金力とである。彼の妻は表向きは一人だが、近親相姦禁忌の許す範囲において、実際はその数は無限と行ってよい。

この大権力者の下僕たる・哀れな醜い独り者は、身分が卑しいので、直接の主人たるこの第一長老はもとより、第二第三第四ルバツクの前を通る時でも、立って歩くことは許されなかった。必ず匍匐膝行して過ぎなければな

らないのである。もし独木舟カヌーに乗って海に出ている時に長老の舟が近付こうものなら、賤いやしき男は独木舟の上から水中に跳び込まねばならぬ。舟の上から挨拶するごとき無礼は絶対に許されない。ある時そうした場合にぶつかり、彼が謹しんで水中に飛び込もうとすると、一匹の鱧ふかの姿が目に入った。彼が躊躇ちゆうちよするのを見た長老の従者が、怒って棒切を投げつけ、彼の左の目を傷きずつけた。やむをえず、彼は鱧の泳いでいる水の中に跳び込んだ。その鱧がもう三尺大きい奴だったら、彼は、足の指を三本喰切られただけでは済まなかったに違いない。

この島から遙か南方に離れた文化の中心地コロール島には、既に、皮膚の白い人間共が伝えたという悪い病が侵入して来ていた。その病には二つある。一つは、神聖な天与の秘事を妨げる怪けしからぬ病であつて、コロールでは男がこれにかかる時は男の病と呼ばれ、女がなる場合は女の病といわれる。もう一つの方は、極めて微妙な徴候の容易に認め難い病気であつて、軽い咳が出、顔色が蒼あおざめ、身体が疲れ、痩せ衰えていつの間にか死ぬのである。血を喀はくこともあれば、喀かないこともある。この話の主人公たる哀れな男は、どうやら、この後の方

の病氣にかかっていたらしい。絶えず空咳からぜきをし、疲れる。アミアカ樹の芽をすり潰してその汁を飲んでも、蝟樹オゴルの根を煎じて飲んでも、一向に効き目が無い。彼の主人はこれに気が付き、哀れな下男が哀れな病氣になったことを大變ふさわしいと考えた。それで、この下男の仕事はますますふえた。

哀れな下男は、しかし、大變賢い人間だったので、己おのれが運命を格別辛いつらとは思わなかった。己の主人がいかに苛刻であっても、なお、自分に、視ることや聴くことや呼吸することまで禁じないから有難いと思っていた。自

分に課せられる仕事がいかに多くとも、なお婦人の神聖な天職たる芋田耕作ムセイだけは除外されていることを有難く思おうと考えた。鱧のいる海に跳び込んで足の指三本を失ったことは不幸のようだが、それでも脚全体あしを喰切られなかったことを感謝しよう。空咳の出る疲れ病に罹ったことも、疲れ病と同時に男の病にまで罹る人間もあることを思えば、少くとも一つの病だけは免まぬかれたことになる。自分の頭髪が乾いた海藻かいそうのように縮れていないことは明らかに容貌上の致命的欠陥には違いないが、荒れ果てた赭土丘アケズのように全然頭髪の無い人間だって俺は知

っている。自分の鼻が踏みつけられたバナナ畑の蛙のよ
うに潰れていないことも甚だ恥ずかしいことは確かだ
が、しかし、全然鼻のなくなった腐れ病の男も隣の島に
は二人もいるのだ。

だが、足るを知ることかくのごとき男でも、やはり、
病が酷いよりも軽い方がいいし、真昼の太陽の直射の下
でこき使われるよりも木蔭で午睡ひるねをした方が快い。哀れ
な賢い男も、時には、神々に祈ることがあった。病の苦
しみか労働の苦しみか、どちらかを今少し減じたまえ。
もしこの願が余りに慾張り過ぎていないなら、なにとぞ、

と。

タロ芋を供えて彼が祈ったのは、椰子蟹やしがかにカタツツと
 蚯蚓みみずウラズほこりの祠ほこりである。この二神は共に有力な悪神と
 して聞えている。パラオの神々の間では、善神は供物くもつを
 供えられることがほとんど無い。ご機嫌をとらずとも崇たたり
 をしないことが分っているから。これに反して、悪神は
 常に鄭重ていちょうに祭られ多くの食物を供えられる。海嘯つなみや暴
 風や流行病は皆悪神の怒いかりから生ずるからである。さて、
 力ある悪神・椰子蟹と蚯蚓とが哀れな男の祈願を聞入れ
 たのかどうか、とにかくそれからしばらくして、ある晩

この男は妙な夢を見た。

その夢の中で、哀れな下僕はいつの間にか長老ルバツクになつていた。彼の坐っているのは母屋おもやの中央、家長のいるベき正座である。人々は皆唯々いゝいゝとして彼の言葉に従う。彼の機嫌を損ねはせぬかと惴々ずいずいえん焉んとして懼おそれるもののごとくである。彼には妻がある。彼の食事の支度したくに忙しい婢女はしためも大勢いる。彼の前に出された食卓の上には、豚の丸焼や真赤に茹ゆだつたマングローブ蟹かにや正覚坊しょうがくぼうの卵が山と積みまれている。彼は事の意外に驚いた。夢の中ながら、夢ではないかと疑つた。何か不安で仕方が無い。

翌朝、目が醒めると、彼はやはり屋根が破れ柱の歪んだいつもの物置小舎の隅に寝ていた。珍しく、朝鳥の鳴く音にも気付かず寝過ごしたので、家人の一人に酷く叩かれた。

次の夜、夢の中で彼はまた長老になった。今度は彼も前夜ほど驚かない。下僕に命令する言葉も前夜よりは大分横柄になつて来た。食卓には今度も美味佳肴が堆く載っている。妻は筋骨の逞しい申し分のない美人だし、章魚の木の葉で編んだ新しい呉麩の敷き心地もヒヤヒヤと冷たくて誠に宜しい。しかし、朝になると、依然とし

て汚ない小舎の中で目を醒ました。一日中烈しい労働に追い使われ、食物としてはクカオ芋の尻尾と魚のあらとしか与えられないことも今まで通りである。

次の晩も、次の次の晩も、それから毎晩続いて、哀れな下僕は夢の中で長老になった。彼の長老ぶりは次第に板について来た。ご馳走を見ても、もう初めの頃のように浅間しくガツガツするようないことは無い。妻との間に争いをしたことも度重なった。妻以外の女に手出しが出来ることを知ってからも久しくなる。島民等を頤い使しして、舟庫を作らせたり祭祀をとり行ったりもした。司祭に導

かれて神前に進む彼の神々こうごうしさに、島民共は齊ひとしく古英こえい雄ゆうの再来ではないかと驚嘆した。彼に仕える下僕の一人に、昼間の彼の主人たる第一長老と覚しき男がいる。この男の彼を怖れる様といったら、可笑おかしい位である。それが面白さに、彼は、第一長老に似たこの下僕に一番酷い労働をいいつける。漁もさせれば、椰子蜜採りもさせる。我が乗る舟の途みちに当るからとて、この下僕を独木舟から鱧の泳ぐ水中に跳び込ませたこともある。哀れな下僕の慌あわてまどい畏おそれる様が、彼にいたく満足を与える。昼間の劇しい労働も苛酷な待遇ももはや彼に嘆声を洩

らさせることはない。賢い諦^{あきら}めの言葉を自らに言っ
て聞かせる必要もなくなった。夜の楽しさを思えば、昼間
の辛^{しん}勞^{ろう}のごとき、ものの数ではなかつたからである。一
日の辛い仕事に疲れ果てても、彼は世にも嬉しげな微笑
を浮べつつ、榮^{えい}耀^{よう}榮^{えい}華^がの夢を見るために、柱の折れかか
った汚ない寢床へと急ぐのであつた。そういえば、夢の
中で摂^とる美食のせいであろうか、彼は近頃めつきり肥つ
て来た。顔色もすっかり良くなり、空咳もいつかしく
なつた。見るからに生き生きと若返つたのである。

ちようど哀れな醜い独身者の下僕がこうした夢を見始めた頃から、一方、彼の主人たる富める大長老もまた奇態きたいな夢を見るようになった。夢の中で、貴き第一長老は惨みじめな貧しい下僕になるのである。漁から椰子蜜採りから椰子縄作りから麵麴パンの実取りや独木舟造りに至るまで、ありとあらゆる労働が彼に課せられる。こう仕事が多くては、無数に手の生えている蜈蚣むかででも遣りやきれまいと思われるほどだ。それらの用をいいつける主人というのが、昼間は己の最も卑しい下僕であるはずの男である。これがまたひどく意地悪で、次から次へと無理をいう。大蛸

には吸い付かれ、車渠員アキムには足を挟まれ、鱧には足指を切られる。食事はといえは、芋の尻尾と魚のあらばかり。毎朝、彼が母屋の中央の贅沢な呉座の上で目を醒ます時は、身体は終夜の労働にぐったりと疲れ、節々がズキズキと痛むのである。毎晩こういう夢を見ている中うちに、第一長老の身体から次第に脂気がうせ、出張った腹がだんだんしぼんで来た。實際芋の尻尾と魚のあらばかりでは、誰だつて痩せる外はない。月が三回盈欠するみちかけ中に長老はみじめに衰えて、いやな空咳までするようになった。

ついに、長老が腹を立てて下僕を呼びつけた。夢の中

で己を虐^{しいた}げる憎むべき男を思いきり罰してやろうと決心したのである。

ところが、目の前に現れた下僕は、かつての痩せ衰えた・空咳をする・おどおどと畏れ惑う・哀れな小心者ではなかった。いつの間にかデツプリと肥り、顔色も生き生きとして元気一杯に見える。それに、その態度がいかに自信に充ちていて、言葉こそ叮^{ていねい}嚀ながら、どう見ても此^{こち}方の頤使に甘んずるものとは到底思われぬ。悠揚^{ゆうよう}たるその微笑を見ただけで、長老は相手の優勢感にすっかり圧倒されてしまった。夢の中の虐待者に対する恐怖

感までがよみがえ甦よみがえって来て彼を脅した。夢の世界と昼間の世界と、いずれがより現実なのかといううたが疑がいが、チラと彼の頭を掠かすめた。痩せ衰えた自分のごとき者が今更咳せきをしながらこの堂々たる男を叱り付けるなどとは、思いも寄らぬ。

長老は、自分でも予期しなかったほどの慇懃いんぎんな言葉で、下男に向い、彼が健康を回復した次第を尋ねた。下男は詳しく夢のことを語った。いかに彼が夜ごと美食あに饜あき足たるか。いかに婢僕ひぼくにかしずかれて快い安逸あんいつを娯たのしむか。いかに数多あまたの女共たによって天国の楽しみを味わうか。

下僕の話聞き終つて、長老は大いに驚いた。下男の夢と己の夢とのかくも驚くべき一致は何にもとづ基くのか。夢の世界の栄養が醒めたる世界の肉体に及ぼす影響は、またかくのごとく甚だしいのか。夢の世界が昼の世界と同じく（あるいはそれ以上に）現実であることは、もはや疑う余地が無い。彼は、恥を忍んで、下男に己が毎夜の夢のことを告げた。いかに自分が夜ごと劇しい労働を強いられるか。いかに芋の尻尾と魚のあらとだけで我慢せねばならぬか。

下男はそれを聞いても一向に驚かぬ。さもあろうと云

った顔付で、疾とつくに知っていた事を聞くように、満足げな微笑を湛えながら鷹揚うなずに頷く。その顔は、誠に、干潟の泥の中に満腹して眠る海鰻カシボクのごとく、至上の幸福に輝いている。この男は、夢が昼の世界よりも一層現実であることを既に確信しているのである。アアと心からの溜息を吐きながら、哀れな富める主人は貧しく賢い下僕の顔を妬ねたましげに眺めた。

×

×

×

×

右は、今は世に無きオルワンガル島の昔話である。オルワンガル島は、今から八十年ばかり前のある日、突然、住民諸共もろとも海底に陥没してしまった。爾来じらい、このような仕合せな夢を見る男はパラオ中にいないということである。

(昭和十七年十一月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館